

BAUDELAIRE の死を祓う詩的手法 (2)

南 直 樹*

IV

BAUDELAIRE の死を祓う四番目の詩的手法は、詩人と他者との同一化を図り、他者の苦痛を^{わか}領ちあい共苦し、そして他者のそれからの蘇りを享受しようとするものである。我々はいくつかの詩の中で、BAUDELAIRE が彼の感覚の地平を拵げ、他者の肉体と魂の中に干渉することに強い歎びを見出すことに気づく。それは同じ瞬間に様々な生を生きるという比類のない印象を感じながら、他者の意識と彼自身の意識を融合することによって、彼の欲望の全体的な展開を演出しようとする。*Le Peintre de la vie moderne* の次の一節は、BAUDELAIRE のこの詩的手法のメカニズムを良く説明している。

群衆が彼の領分であることは、空気が鳥の領分、水が魚の領分であるのと同じだ。彼の情熱と彼の職務、それは群衆と結婚することだ。完全な遊歩者にとって、情熱的な観察者にとって、数の中に、波打つものの中に、運動の中に、うつろい易いものと無限なるものの中に住まいを定めることは、^{はて}涯しもない悦楽である¹⁾。

* 福岡大学人文学部教授

この「群衆との結婚」は、パリの遊歩者^{フラヌール}である BAUDELAIRE にとって詩人としての「レゾン・デートル」(存在理由)であり、その表題も *Les Foules* と題された散文詩の中ですばらしく表明された思想である。

Il n'est pas donné à chacun de prendre un bain de multitude : jouir de la foule est un art ; et celui-là seul faire, aux dépens du genre humain, une ribote de vitalité, à qui une fée a insufflé dans son berceau le goût de travestissement et du masque, la haine du domicile et la passion du voyage.

Multitude, solitude : termes égaux et convertibles pour le poète actif et fécond. Qui ne sait pas peupler sa solitude, ne sais pas non plus être seul dans une foule affairée.

Le poète jouit de cet incomparable privilège, qu'il peut à sa guise être lui-même et autrui. Comme ces âmes errantes qui cherchent un corps, il entre, quand il veut, dans le personnage de chacun. Pour lui seul, tout est vacant ;²⁾

「群衆に沐浴^{ゆあみ}するというのは、誰にでもできる業^{わざ}ではない。群衆を楽しむことは一つの術^{アール}である。そして人類をうまく利用して生命力を大いに飲み食いできるのは、ただひとり、揺籃にあった時、仙女から、仮装や仮面への好みや、己が棲家^{すみか}への憎悪や、旅への情熱を吹き込まれた者のみだ。群衆、孤独。活動的で多産な詩人にとって、たがいに等しく、置き換えることの可能な語。己の孤独^{にぎ}を賑^{にぎ}わせる術を知らぬ者は、忙^{せわ}しい群衆の中にあって独りである術をも知らない。詩人は、思いのままに自分自身であり他者でもあることができるという、この比類のない特権を享けている。一個の身体を求めてさまようあれらの靈魂たちと同じように、詩人は、欲する時に、どんな人物の中へでも入ってゆく。彼にとってだけは、すべてが空席なのだ」。死を祓うために BAUDELAIRE が悦楽をもって身を委ねる他者との様々な同一化は、感覚や感情の多様性を駆使し

て行なわれる。

Les Petites Vieilles という長詩では、BAUDELAIRE が優しさと共感を持って小さな老婆たちの内奥に入り込み、想像上で彼女たちの生を共に生きる姿が見出される。René GALAND は「その小さな老婆たちの描写において、詩人は見事な妙技でもって、恐怖と憐憫、イロニーと感動、冷やかさと同情を交互に行使させるであろうと」³⁾述べる。

Dans les plis sinueux des vieilles capitales,
Où tout, même l'horreur, tourne aux enchantements,
Je guette, obéissant à mes humeurs fatales
4 Des êtres singuliers, décrépits et charmants.⁴⁾

「年老いた古い^{みやこ}首都のうねりくねった襞の中、すべて、おぞましいものさえが、魅惑と化する所で、わが宿命の性分に従い、私は待ち伏せる、老いぼれながらも魅力のある、奇妙な存在たちを」(v. 1-4)。首都パリは「年老いて」おり、「うねりくねった襞」を持つ。これはこれから登場する「小さな老婆たち」と類比をなしている。「たがのゆるんだこの怪物たちも、昔は女だったのだ」。「腰は折れ、^{せむし}僂僂、あるいは振れた怪物たち、彼らを愛そうではないか！あれでもまだ魂なのだから」と詩人は云う。J.-D.HUBERT によれば、小さな老婆たちを「彼ら」と男性複数形の代名詞を用いるのは、彼女たちを「怪物」と受けたつながりのためであり、中性化した老婆たちを語るための意識的な語法である⁵⁾。彼女たちは、外見上は生の廢墟と見えながら、「魂」を失っていない。

8 Sous des jupons troués et sous de froids tissus

Ils rampent, flagellés par les bises iniques,

Frémissant au fracas roulant des omnibus,
Et serrant sur leur flanc, ainsi que des reliques,
12 Un petit sac brodé de fleurs ou de rébus ;⁶⁾

「穴のあいた下袴^{ベチコート}やら、ひんやりする布地をまとい、彼らは這ってゆく、意地悪な北風に鞭打たれ、乗合馬車の軋る轟音に音に身を震わせて、花模様や判じ絵の縫い取りをした、小さな手提げを、聖遺物よろしく、小脇にしかと抱え込んで」(v. 8-12)。「花模様や判じ絵の縫いとられた「小さな手提げ」は女の夢の最後の残骸である」⁷⁾ (『悪の花注釈』)。しかもそれは「聖遺物」のようであり、老婆たちの聖化を予告している。

Ils trottent, tout pareils à des marionnettes ;
Se traînent, comme font les animaux blessés,
Ou dansent, sans vouloir danser, pauvres sonnettes
16 Où se pend un Démon sans pitié! Tout cassés

Qu'ils sont, ils ont des yeux perçants comme une vrille,
Luisants comme ces trous où l'eau dort dans la nuit ;
Ils ont les yeux divins de la petite fille
20 Qui s'étonne et qui rit à tout ce qui reluit.⁸⁾

「彼らは小刻みに走る、^{マリオネット}操り人形のように。傷ついたた動物のように、足ひきずってゆく者もあれば、情容赦ない〈悪魔〉がぶら下がついて引く哀れな呼び鈴のように、踊りたくないのに、踊り続ける者もいる！すっかり腰曲がっているとは言え、その眼は^{きり}錐のように鋭く、夜中に水の眠るあの穴のように光る。光

るものなら何にでも、驚き、笑う、小さな女の子そのままの、神々しい眼をもつ」(v. 13-20)。『悪の花注釈』は「小さな老婆たち」の眼は錐のようである。Vrille は正確にはねじ錐である。らせん状に切もんで深部に達する。らせん状の運動は西欧精神の愛好するところだが、ここでは老婆の意識が、都の、人生の深部へらせん状に探索の眼を向ける。あたかも詩人の意識のねじ錐が、老婆の生態に、意識にきりきりと揉み入ってゆくように」⁹⁾と述べる。老婆にはまだ魂が残っている。眼の神々しい光がその魂である。身体の最後に残ったその光は、彼女の生の証であり、しかも少女の眼のように無垢である。

—Avez-vous observé que maints cercueils de vieilles

Sont presque aussi petits que celui d'un enfant?

La mort savante met dans ces bières pareilles

24 Un symbole d'un goût bizarre et captivant,

Et lorsque j'entrevois un fantôme débile

Traversant de Paris le fourmillant tableau,

Il me semble toujours que cet être fragile

28 S'en va tout doucement vers un nouveau berceau ;¹⁰⁾

「—お気づきだろうか、老婆の棺桶には、子供のそれと同じ位小さいのが、たくさんあることに？これらの柩が互いに似ているのは、博識の〈死〉の示す、奇怪にも魅惑的な趣味にあふれたひとつの象徴、そして私は、蟻のように人のうごめくバリの画面を横切ってゆく、虚弱な幽霊の一人を垣間見るたびに、この脆い生きものは、新しい揺籃の方へゆっくり足を運ぶのだと、いつも思わずにはいられない」(v. 21-28)。阿部良雄は「老婆と子供の棺桶が同じだというのは偶然の現象ではなく、どんな象徴を用いてどんな寓意を表すべきかを

よく心得た（「博識な」）死神の故意のわざである」¹¹⁾と注釈する。すなわち、老いて小さくなった老婆は甕^{るっほ}、子供と同じ揺籃の無垢へと戻っているのである。老いと死が緩和されている。興味が憐憫に、憐憫が愛着に、詩人の心は微妙に変化してゆく。

— Ces yeux sont des puits faits d'un million de larmes,
Des creusets qu'un métal réfroïdi pailleta...
Ces yeux mystérieux ont d'invincibles charmes
36 Pour celui que l'austère Infortune allaita!¹²⁾

「—これらの眼は、百万もの涙でできた井戸、冷えてしまった金属がまだ光っている^{るっほ}坩堝...これらの神秘的な眼には、打ち勝ちがたい魅力がある、厳しい〈不運の女神〉の乳を吸った者には！」(v. 33-36)。「第18行の「穴ぼこ」はここで「井戸」に変わる。眼は井戸だ。井戸掘り職人は棺桶職人をうける。井戸掘り職人は棺桶職人と同じく、パリ市民に親しい存在だった。そして、棺も井戸も丸くつくり、丸く掘る。眼窩から穴ぼこへ、穴ぼこから棺へ、棺から井戸へ、イマージュは移って行く」¹³⁾（『悪の花注釈』）。「幸運の女神はあるが、不運の女神はいない。いない女神を措定する苦い笑い。詩人は不運の女神の乳を吸って生長した。不運の申し子である。彼の眼には、そして彼の眼にのみ、水と火と金属の合成したというふしぎな涙の魅力が、幻想として圧倒的に迫ってくる」¹⁴⁾（『悪の花注釈』）。

この後、詩人は老婆をローマのフラスカティやティヴォリの歓楽街の伝説の女性たちに譬えて、パリの卑近な現実と崇高さを混ぜ合わせた後、時間は彼女らを公平に取り扱おうと述べ、老婆たちの不運をこう書く。

L'une, par sa patrie au malheur exercée,

L'autre, que son époux surchargera de douleurs,
 L'autre, par son enfant Madone transpercée,
 48 Toutes auraient pu faire un fleuve avec leurs pleurs!¹⁵⁾

「ある女は、祖国によって不幸の試練にかけられ、ある女は、夫から背負い切れぬほどの苦痛を与えられ、ある女は、わが子によって胸を突き刺された^{マドンナ}聖母、誰もが、自分の涙で大河を作ることができただろうに！」(v. 45-48)。

「祖国によって不幸の試練にかけられ」について、阿部良雄は「『夫、恋人あるいは息子を戦争によって失った、という意味だろうが、一八四八年の記憶も消えやらぬ五九年の作だから、反乱に参加したパリの労働者でバリケードに戦死したり死刑・徒刑に処せられたりした者の多かった事実を思うことも許されよう』¹⁶⁾と注釈する。詩人はそれらの老婆たちの一人を凝視し、次のように敬意を描き出す。

Ah! que j'en ai suivi de ces petites vieilles!
 Une, entre autres, à l'heure où le soleil tombant
 Ensanglante le ciel de blessures vermerilles,
 52 Pensive, s'asseyait à l'écart sur un banc,

 Pour entendre un de ces concerts, riches de cuivre,
 Dont les soldats parfois inondent nos jardins,
 Et qui, dans ces soirs d'or où l'on se sent revivre,
 56 Versant quelque héroïsme au cœur des citadins.

Celle-là, droite encor, fière et sentant la règle,
 Humait avidement ce chant vif et guerrier ;

Son œil parfois s'ouvrait comme l'œil d'un vieil aigle ;
60 Son front de marbre avait l'air fait pour le laurier!¹⁷⁾

「ああ！、幾度私はそあれらの小さな老婆たちの後をつけたことか！なかでも、あるひとり、沈む陽が紅くれない 空に傷口をあける血まみれにする時刻、想いに沈みながら、ひとり離れてベンチに坐り、聴こうとしていたのは、兵士たちが、時おり、われらの公園に波と溢れさせる、金管プラスの音も高らかな、ああした野外演奏会、それは、生命甦いのちる心地のする、あれら黄金こがねの夕べ、都市に住む者の心にくばくかの英雄的な気分を注ぐ音楽。この女は、身は今も真直ぐに、誇り高く、規律正しく、澁刺として勇壮なこの調べを貪むさぼるように飲み干していた。その眼は時おり老いた鷺の眼のように見開かれていた。大理石のその額、月桂冠を受けるにふさわしかった！」(v. 49-60)。ここには、密偵のように老婆の後をつける詩人の姿がある。「刻限はたそがれ、沈む——ではない落ちる太陽、落日は空を朱けに染めている。老婆が落ち行くように太陽も墜落する。老婆は人生から、生からすらも疎外されており、心に朱色の傷口をあけている。空にも朱色の傷口があいており、そこから流れ出る血が、暮れゆく空を血まみれにする。都の夕暮れの現実描写であり、それと抱きあうようにして、老婆の心象の歌がある」¹⁸⁾ (『悪の花注釈』)。軍楽隊の金管の調べを聴くことによる、老婆の蘇生というモチーフが強調されている。彼女は、コンサートの音の波を呑むことで、意識であり心である「眼」を開くのである。死を生に転換させた勝利のしるし、それが月桂冠である。

Telles vous cheminez, stoïques et sans plaintes,
À travers le chaos des vivantes cités,
Mères au cœur saignant, courtisanes ou saintes,
64 Dont autrefois les noms par tous étaient cités.

Vous qui fûtes la grâce ou qui fûtes la gloire,
 Nul ne vous reconnaît! un ivrogne incivil
 Vous insulte en passant d'un amour dérisoire ;
 68 Sur vos talons gambade un enfant lâche et vil.

Honteuses d'exister, ombres ratatinées,
 Peureuses, le dos bas, vous côtoyez les murs ;
 Et nul ne vous salue, étrangères destinées!
 72 Débris d'humanité pour l'éternité mûrs!¹⁹⁾

「かくのごとくに、あなた方は歩み行く、毅然として嘆きも洩らさず、^{いのち}生命ある都市の混沌^{よぎ}を過りつつ。血滴る心臓を持つ母であれ、娼婦であれ、聖女であれ、その名はかってすべての人々の口にするとところであったのに。かつては優美さであった、あるいは栄光であった、あなた方を、何人もそれと見知りはずかしく、^{はずかし}侮辱する。あなた方のすぐ後で跳ねまわるのは、卑怯で下品な子供。生きているさえ恥ずかしく、^{しな}萎びた影法師、怯えた様子、背を丸め、壁に寄りそい歩いてゆく。そして誰も、あなた方に挨拶^{さだめ}などせぬ、奇怪な運命の人々に！永遠の世に入るべく熟した、人間の残骸よ！」(v. 61-72)。詩人は、繰り返しこの老婆たちが名を失ったことを嘆く。René GALAND は、これを時の破壊作用の激しさに対する^{えんさ}怨嗟であると言う²⁰⁾。しかし、人は名を失う老婆になってはじめて、群衆の中のひとりになる、そして蘇生の機会を伺う。「mûr とは、果実が熟し切って地に落ちるように、人は死に向かってあと一歩というところまで熟し切っているということ。彼岸に向かう老婆は、ここでも、永遠を間近に見つめる詩人と同一視されている」²¹⁾ (『悪の花注釈』)。

Mais moi, moi qui de loin tendrement vous surveille,
L'œil inquiet, fixé sur vos pas incertains,
Tout comme si j'étais votre père, ô merveille!
76 Je goûte à votre insu des plaisirs clandestins? :

Je vois s'épanouir vos passions novices ;
Sombres ou lumineux, je vis vos jours perdus ;
Mon cœur multiplié jouit de tous vos vices!
80 Mon âme resplendit de toutes vos vertus!

Ruines! ma famille! ô cerveaux congénères!
Je vous fais chaque soir un solennel adieu!
Où serez-vous demain, Êves octogénaires,
84 Sur qui pèse la griffe effroyable de Dieu?²²⁾

「だがこの私、不安な眼を、あなた方のおぼつかない足取りにじっと注いで、おおなんという不思議！あたかもあなた方の父親でもあるかのように、遠くから優しく見守るこの私はあなた方の知らぬうちに、秘密の悦楽を味わう。私には見える、あなた方の初々しい情熱が花開くのを。暗くとも、輝かしくとも、あなた方の失われた日々を私は生きる。いくつにも数を増した私の心は、あなた方の悪徳のすべてを享受する！私の魂は、あなた方の美德のすべてにより輝き渡る！生ける廃墟よ！わが同族よ！同じ種類の脳髓たちよ！私は毎晩あなた方に荘重な別れの言葉を送る！明日、あなた方はどこに在るのだろうか？八十歳のエヴァたち、神の恐るべき鉤爪^{かぎつめ}に押さえつけられる人々よ」(v. 73-84)。CRÉPET et BLINはこの「いくつにも数を増した私の心」の享受を *Les Foules* としてまた *Journaux intimes* の中で問題とされている「魂の神聖な売春」と近づ

けている²³⁾。

売春すること最も大なる存在、それは最高度の存在者、すなわち神である。なぜなら神は各々の個人にとってこよなき友であり、なぜなら、愛の尽きることなき共同の貯水池であるからだ²⁴⁾。(Mon cœur mis à nu)

「売春とは自分の人格をいろんな人に^{わか}頒ち与えることであるから、もっとも売春的なものは神である」²⁵⁾ (『悪の注釈』)。詩人は、想像的にいろんな女性の中に忍びこむことで、自ら^{みずか}が神に近い存在になっている。詩人は子供となっていた老婆たちの父親に変身する。「抽象レベルでの変身、蘇生、転生という秘儀を、あたかも楽の音を呑むように官能的に味わう、これが「秘密の悦楽」というものであろう。抽象はここにおいて肉感となり、記憶は魅りとなり、詩人はさまざまな女性に化身してゆく」²⁶⁾ (『悪の花注釈』)。「人類の生誕者イヴは、眼前の老婆たち、80歳の老婆たちである。彼女は神の「恐るべき」爪につかまれ、死に瀕している。が、神は優しく見守っている、彼女はイヴとなって再生するのか。明日、未来において、死者はキリストのように蘇るであろうか」²⁷⁾ (『悪の花注釈』)。老婆たちの「悪徳」が披瀝されるのは、老いた都パリにおいてであり、蟻のような群衆の中においてである。詩人の心は、これらの老婆たちに分岐し、窺い見、対話し、遂にはその悪徳とも美徳とも合体する。こうして詩人は老婆とともに蘇り、死を祓おうとする。それがこの詩で果たされる「秘蹟」である。

同様に、散文詩 *Les Veuves* の中で、BAUDELAIRE は孤独な寡婦たちのうちのひとりに特別な注意を向け、幻覚的にその生を想像する。ここでは *Les Petites Vieilles* と同じ主題が展開されている。

Vauvenargues dit que dans les jardins publics il est des allées hantées

principalement par l'ambition déçue, par les inventeurs malheureux, par les gloires avortées, par les cœurs brisés, par toutes ces âmes tumultueuses et fermées, en qui grondent encore les derniers soupirs d'un orage, et qui reculent loin du regard insolent des joyeux et des oisifs. Ces retraites ombreuses sont les rendes-vous des éclopés de la vie.²⁸⁾

「ヴォーヴナルグは言っている、公園の中には、主として、挫かれた野心や、不運な発明家や、流産した栄光や、傷つけられた心など、その中にいまだなお雷雨の名残の溜息が轟いている、騒がしくも閉ざされた魂たちが、陽気な人々や閑人たちの無遠慮な視線を遠く避けて、行き来する小径がある、と。蔭深いこうした隠れ処は、人生の戦いに手疵を負うた者たちの集うところだ。「詩人や哲学者は、とりわけこうした場所へと、好んで彼らの飽くことを知らぬ推測をさし向ける。ここには間違いなく、糧となるものがある」²⁹⁾。彼らは「富める者たちの歓楽」には空虚さしか見出さない。「それとは反対に、彼らは、すべての弱いもの、破滅したもの、悲しみに打ちひしがれたもの、孤児なるものへと、抗うすべもなく引き寄せられるのを感じる」³⁰⁾。「経験を積んだ目には決して見誤りはしない。これらの硬ばった、あるいは打ち萎れた顔立ちの中に、これらの落ち窪んでどんよりした、あるいは、闘争の最後の火花に輝く眼の中に、これらの深く刻まれた数多い皴の中に、これらのかくも緩慢な、あるいは、かくもせかせかした歩きぶりの中に、欺かれた愛や、無視された献身や、報いられなかった努力や、つましく黙々と耐え忍んだ飢えや寒さの、数限りない伝説を、ただちに読みとるのだ」³¹⁾。そして詩人は「あなたは時として、それらの淋しいベンチに腰かけている寡婦たち、貧しい寡婦たちを見かけたことがおありだろうか？」³²⁾と読者に問いかける。詩人は「喪に服していようと居まいと、彼女たちを見分けることはたやすい。そもそも、貧者の喪の装いの中にはいつも、何かしら欠けているもの、それを一段と悲痛にする、調和の不在が

ある。貧しい者は、苦痛をさえけちけちすることを余儀なくされるのだ³³⁾と寡婦たちの苦痛を^{わか}頷ちあうことができることを宣言する。そして「最も悲しくまた最も悲しみをもよおさせる寡婦とは、いったい、どちらだろう、自分の夢^{わか}を頷ち合う相手にもならぬ子供をつれた寡婦と、まったく独りぼっちの寡婦と？ 私にはわからない…」³⁴⁾と問いながら、一人の寡婦の後をつけ、次のように描写する。

Il m'est arrivé une fois de suivre pendant de longues heures une vieille affligée de cette espèce ; celle-là roide, droite, sous un petit châle usé, portrait dans tout son être une fierté de stoïcienne.

Elle était évidemment condamnée, par une absolue solitude, à des habitudes de vieux célibataire, et le caractère masculin de ses mœurs ajoutait un piquant mystérieux à leur austérité. Je ne sais dans quel misérable café et de quelle façon elle déjoua. Je la suivis au caninet de lecteur ; et je l'épiai longtemps pendant qu'elle cherchait dans les gazettes, avec des yeux actifs, jadis brûlés par les larmes, des nouvelles d'un intérêt puissant et personnel.

Enfin, dans l'après-midi, sous un ciel d'automne charmant, un de ces ciels, d'où descendent en foule les regrets et les souvenirs, elle s'assit à l'écart dans un jardin, pour entendre, loin de la foule, un de ces concerts dont la musique des régiments gratifie le peuple parisien.

C'était sans doute là la petite débauche de cette vieille innocente (ou de cette vieille purifiée), la consolation bien gagnée d'une de ces lourdes journées sans ami, sans causerie, sans joie, sans confident, que Dieu laissait tomber sur elle, depuis bien des ans peut-être! trois cent soixante-cinq fois par ans.³⁵⁾

「ある時私は、この種の悲しみに沈んだ老婦人の後を、何時間も^つ跟けて行ったことがある。この婦人は、擦り切れた小さな肩掛けの下に身を硬^{こわ}ばらせ、背を真直ぐにして、全身に^{ストア}克己主義者の誇り高さを示していた。彼女は明らかに、絶対の孤独によって、年老いた独身者の習慣を強いられていたものであり、彼女の習慣の男性的な特質が、その厳格さに不思議な風味を添えていた。彼女がどんなみずぼらしいカフェでどんな風に朝食をすませたのか、私は知らない。私は公共新聞雑誌閲覧所まで彼女のあとを^こ跟つけて行った。そして彼女が、かつて涙に焼かれたこともある眼を動かして、強烈にしかも個人的に興味を引くようなニュースがありはしないかと、新聞の中を^{あざ}漁っているのを、私は長いあいだ^{うかが}窺った。ようやく、午後になって、快い秋の空、哀惜の念や思い出が群れをなして降って来るああいう空の下で、彼女は公園の片隅に腰をおろし、軍楽隊がパリの民衆に^{ふるま}振舞う例の^{コンサート}演奏会の一つを、群衆から遠く離れて聴こうとしていた。それは疑いもなく、この純真な老婦人の（もしくは、この^{きよ}浄められた老婦人の）ささやかな道楽であり、おそらく既に何年も何年も前から！一年に三百六十五ずつ神が彼女の上に降りかからせていた日々、友にも語らいも遊びにも打ち明け相手にも恵まれぬそれらの重苦しい日々の一つに対して、正当にも^か獲ち得た慰めだったのだ。「公共新聞雑誌閲覧所とは安価な閲覧料を払って新聞・雑誌・新刊書を読むことのできる施設で、十八世紀に始まったもの。この頃は当局の許可を得て官吏の未亡人などが運営していた」³⁶⁾（阿部良雄）。また *Titres et plans de poèmes en prose* に「ミュゼール園の前に立つ、メランコリックな背の高い寡婦」とあり、同じく阿部良雄は「舞踏会やオペラ座舞踏会オーケストラ指揮者として人気のあったミュゼール・パール（一七八九—一八五三）は夏季にはシャン＝ゼリゼの東端で野外演奏会開いたし、ミュゼール・フィスは一八五九年にその会場を今日のフランクリン＝D＝ルーズベルト大通りとクール＝ラ＝レーヌの角に移したが、これは、「寡婦の小径」（孤独な女がアヴァンチュールを求めて集る所）と名づけられた今日のモンテーニュ大通り

に近い³⁷⁾と説明している。この寡婦は「^{ストア}克己主義者の誇り高さ」を示しており、「絶対の孤独によって、年老いた独身者の習慣を強いられて」おり、「彼女の習慣の男性的な特質が、その厳格さに不思議な風味を添えていた」とは、彼女が孤独を耐え、乗り越える意思の力を獲得していることを暗示する。

詩人はまた「別の婦人」にも注目し、その状況を次のように描写する。

Je ne puis jamais m'empêcher de jeter un regard, sinon universellement sympathique, au moins curieux, sur la foule de parias qui se pressent autour de l'enceinte d'un concert public. L'orchestre jette à travers la nuit des chants de fête, de triomphe ou de volupté. Les robes traînent en miroitant ; les regards se croisent ; les oisifs, fatigués de n'avoir rien fait, se dandinent, feignant de déguster indolemment la musique. Ici rien que de riche, d'heureux ; rien qui ne respire et n'inspire l'insouciance et le plaisir de se laisser vivre ; rien, excepté l'aspect de cette tourbe qui s'appuie là-bas sur la barrière extérieure, attrapant gratis, au gré de vent, un lambeau de musique, et regardant l'étincelante fournaise intérieure.³⁸⁾

「私はいつも、公共演奏会の囲いの周りにひしめく下層民の群衆の上に、^{あまね}遍く好意的というわけではないにせよ、少なくとも好奇心にみちた視線を投げずにはいられない。^{オーケストラ}管弦楽は夜を貫いて、祝祭の歌、勝利の歌、あるいは逸楽の歌を投げている。女たちの衣装はきらめきつつ裾を曳く。眼差しは行き交う。^{ひまじん}閑人たちは、^う何もせず^うにいたことに倦んで、のんびりと音楽を賞味する風をよそおいながら、体を軽く揺すっている。ここには、豊かならぬもの、幸福ならぬものは、何もない。屈託のなさ、気ままに生きることの快楽をただよわせぬもの、呼びさまさせぬものは何もない。まことに何もないのだ、ただ、かなた、^{ただ}外囲いの柵によりかかって、風のままに、音楽のきれはしを^{ただ}無料でとらえな

がら、内側の光り輝く^{るっほ}垢殻を眺めている、あれら貧民の^{むれ}群の眺めをのぞけば」。

C'est toujours chose intéressante que ce reflet de la joie du riche au fond de l'œil du pauvre. Mais ce jour-là, à travers ce peuple vêtu de blouses et d'indienne, j'aperçus un être dont la noblesse faisait un éclatant contraste avec toute la trivialité environnante.³⁹⁾

「貧しい者の眼の底に富める者の歓楽がそんなふうに反映するのは、いつ見ても興味深いものだ。だが私は、労働着やキャラコの服を着たこの民衆の間に、その高貴さが周囲全体の卑俗さ鮮やかな対象をなしている一人のひとを見かけたのだ」。

C'était une femme grande, majestueuse, et si noble dans tout son air, que je n'ai pas souvenir d'avoir vu sa pareille dans les collections des aristocratiques beautés du passé. Un parfum de hautaine vertu émanait de toute sa personne. Son visage, triste et amaigri, était en parfaite accordance avec le grand deuil dont elle était revêtue. Elle aussi, comme la plèbe à laquelle elle s'était mêlée et qu'elle ne voyait pas, elle regardait le monde lumineux avec un œil profond, et elle écoutait en hochant doucement la tête.⁴⁰⁾

「それは、背が高く、威厳のある婦人で、その風采全体にそなわる高貴さといえば、過去の美しい貴婦人たちの肖像画の蒐集の中にさえ、匹敵するひとを見た記憶はないほどだった。誇り高い美徳の香りが、その全身から発散していた。悲しげな瘦せたその顔は、身につけていた正式の喪の装いと完全に調和していた。彼女もまた、その中に混じってはいるが眼中にない下層民たちと同じように、深い眼差しをもって輝かしい世界を見つめていたのであり、頭を静かに振

りながら聴き入っていた」。阿部良雄は「monde 囲いの内側の世界、上流人士の集い（社交界）」⁴¹⁾と注釈しているが、すなわち彼女は「誇り高い美徳の香り」を放ち、身には「正式な喪の装い」をした貴賓の女性である。彼女は周りの貧しさや卑俗から隔離されているのであり、ある種の矜持による救いの中にあるのである。詩人は彼女の高貴さを共有することによって、死を祓おうとしている。そして詩人は次のように思う。

Singulière vision! « À coup sûr, me dis-je, cette pauvreté-là, si pauvreté il y a, ne doit pas admettre l'économie sordide; un si noble visage m'en répond. Pourquoi donc reste-t-elle volontairement dans un milieu où elle fait une tache si éclatante? »

Mais en passant curieusement auprès d'elle, je crus en deviner la raison. La grande veuve tenait par la main un enfant comme elle vêtu de noir; si modique que fût le prix d'entrée, ce prix suffisait peut-être pour payer un des besoins du petit être, mieux encore, une superfluité un jouet.⁴²⁾

「奇妙な光景である！「どうみても、と私は心に思った、ここに見られる貧しさは、仮に貧しさがあるとしての話だが、見苦しい儉約^{てい}などを受け容れる体^{てい}のものではない。かくも気高い顔立ちがその証^{あかし}だ。それならなぜ、自分の姿^しがかくも鮮やかな斑点^{しみ}のように目立つ環境に、みずから進んで身を置くのだろうか？」と。だが、好奇心をもって彼女のそばを通った時、私にはその理由を見抜けたような気がした。背の高い寡婦は、彼女と同じように黒を着た子供の手を引いていた。入場料がどれほどささやかであるにしても、それはおそらく、小さな者に必要な品を一つ、いやそれどころか、何か贅沢品、玩具の一つも買うに足りる額だったのだ」。しかし、子供がいても彼女の孤独は変わらない。

Et elle sera rentrée à pied, médiant et rêvant, seule, toujours seule ; car l'enfant est turbulent, égoïste, sans douceur et sans patience ; et il ne peut même pas, comme le pur animal, comme le chien et le chat, servir de confident aux douleurs solitaires.⁴³⁾

「そして彼女は、歩いて帰ったことだろう、物思いにふけり夢見ながら、独り、いつも独りで。なぜとって、子供とは、騒々しく、自分勝手に、優しさも辛抱づよさもないのだから。そして子供は、ただの動物にも、犬と猫にもできること、孤独な苦悩の打ち明け相手をつとめることすらできないのだ」。ここあたりの寡婦と子供の描写については、多くの注釈者が、BAUDELAIREの1861年5月6日の母 AUPICK 夫人宛の手紙を参照するよう促している。その中に次のような件くだりを読むことができる。

幼かった頃、お母さんに対する情熱的な一時期がありました。^{こわ}怖がらずに聴いてください。読んで下さい。この事をこれほどまでにお話したことは、かつてありません。辻馬車での散歩を思い出します。入院させられていらしゃった病院からお出になったところで、息子のことを思っていた証拠に、僕のために描いたペンのデッサンを見せて下さった。僕は恐るべき記憶力をもっているとお思いでしょうか？ 後には、サン＝タンドレ＝デ＝ザール広場と、ヌイイ。長い散歩の数々と、絶えることのない愛情と！夕方にはあんなにも侘しかった河岸を、思い出します。ああ、それは僕にとって、母親の愛情にみちた良い時だった。お母さんにとって悪い時だったに違いない時を、良い時と呼んだりするのを許して下さい。しかし僕はいつもお母さんの中に生きていました。お母さんは僕だけのものだった。お母さんは同時に偶像でもあり友達でもあった。こんなに遠くなった時のことを僕が情熱をこめて語ることができるので、お母さんは驚かれるかもしれません。僕自身驚いてい

なのです。事によると、あらためてもう一度、死への欲望をいただいたので、昔の事どもが僕の精神の中にかくも鮮やかに描き出されるのでしよう⁴⁴⁾。

同じ手紙の中に「大変軽率なことが、僕の若い時に、お母さんによってなされました。お母さんの軽率と、僕の昔の過ちの数々^{かずかず}とが、僕にのしかかり、僕を包んでいます。僕の状況は残酷なものです⁴⁵⁾と読めるが、これは母親の再婚と法廷後見人の設定を指すと考えられる。BAUDELAIRE の母親に対する愛情と反発のアンビバレントな感情がよく伺われるところである。

最後に、我々をもっとも強く感動させるだろうのは、*Les Fenêtres* という散文詩であろう。実際、そこで BAUDELAIRE は精神的に他者と自己の完全な同一化を果たし、成し遂げられた義務の名誉ある感情を抱く。

Celui qui regarde de dehors à travers une fenêtre ouverte, ne voit jamais autant de choses que celui qui regarde une fenêtre fermée. Il n'est pas d'objet plus profond, plus mystérieux, plus fécond, plus ténébreux, plus éblouissant qu'une fenêtre éclairée d'une chandelle. Ce qu'on peut voir au soleil est toujours moins intéressant que ce qui se passe derrière une vitre. Dans ce trou noir ou lumineux vit la vie, rêve la vie, souffre la vie.⁴⁶⁾

「開いている窓を通して外から者は、決して、閉ざされた窓を見る者ほどに多くを見はしない。一本の蠟燭に照らされた窓にもまして、深みがあり、不思議で、豊饒で、暗黒で、眩^{まぼゆ}いものはまたとない。陽光の下で見ることのできるものは、常に、一枚の窓ガラスの後ろに起こることよりも興味に乏しい。この暗い、あるいは明るい穴の中に、生命^{いのち}が生き、生命が夢み、生命が悩んでいるのだ」。詩人は自ら、とりわけ一本の蠟燭に照らされた時、閉じた窓が彼に及ぼす魅惑を説明している。蠟燭に照らされた窓はこの上なく生命^{いのち}の象徴である。

Par-delà des vagues de toits, j'aperçois une femme mûre, ridée déjà, pauvre toujours penchée sur quelque chose, et qui ne sort jamais. Avec son visage, avec son vêtement, avec son geste, avec presque rien, j'ai refait l'histoire de cette femme, ou presque rien, j'ai refait l'histoire de cette femme, ou plutôt sa légende, et quelquefois je me la raconte à moi-même en pleurant.

Si c'eût été un pauvre vieux homme, j'aurais refait la sienne tout aussi aisément.

Et je me couche, fier d'avoir vécu et souffert dans d'autres que moi-même.⁴⁷⁾

「屋根の波の向こうに、私は見かける、熟年の、もう皺の寄った貧しい婦人が、いつも何かの上に身をかかめて、決して外へは出ずにいるのを。その顔から、その衣服から、その身振りから、ほとんど何でもないものから、私はこの婦人の物語を、というかむしろ彼女の伝説を作り上げたのだし、ときおり私は、それを自分に語り聞かせては涙を流す。もしそれが哀れな年老いた男であったとしても、同じように造作なく私は彼の伝説を作り上げたことだろう。そして私は、自分自身の他の人々の中に入って生き、悩んだことに誇りをおぼえながら、床に就く」。ここには *Les Foules* と同じ思想と *Les Petites Vieilles* や *Les Veuves* と同じ共感が表明されている。詩人は最後にこう述べる。

Peut-être me direz-vous : «Es-tu sûr que cette légende soit la vraie ?»
Qu'importe ce que peut être la réalité placée hors de moi, si elle m'a aidé à vivre, à sentir que je suis et ce que je suis?⁴⁸⁾

「ひょっとして君たちは私に言うかもしれない、「その伝説が本物だと君は確信しているのかね？」と。だが、私の外に置かれた現実がどうあり得ようと、

何のかまうことがあろう、もしもそれが、私が生きることを助けてくれ、私が在ることを、そして私が何であるかを感じることを助けてくれたのであれば?」。こうして BAUDELAIRE は、想像上で他者の生との^{コミュニケーション}交感によって生き、自己の存在と自己の意味を見出すのである。

註

使用テキスト：BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, p. Claude PICHOS, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1975, 1976, 2vols. 以下 *O.C.*, t. I, *O.C.*, t. II. と略記。

- 1) *O.C.*, t. II, p. 691
- 2) *O.C.*, t. I., p. 291
- 3) René GALAND, *Baudelaire, poétiques et poésie*, p. 365
- 4) *O.C.*, t. I., p. 89
- 5) J.-D. HUBERT, *L'Esthétique des "Fleurs du Mal"*, p. 97
- 6) *O.C.*, t. I., p. 89
- 7) 多田道太郎編『悪の花注釈』, p. 956
- 8) *O.C.*, t. I., p. 89
- 9) 多田道太郎編『悪の花注釈』, p. 957-958
- 10) *O.C.*, t. I., p. 89-90
- 11) 阿部良雄訳註『ボードレール全集 I』, p. 568
- 12) *O.C.*, t. I., p. 90
- 13) 多田道太郎編『悪の花注釈』, p. 960
- 14) *Ibid*
- 15) *O.C.*, t. I., p. 90

- 16) 阿部良雄訳註『ボードレール全集 I』, p. 568
- 17) *O.C.*, t. I., p. 90-91
- 18) 多田道太郎編『悪の花注釈』, p. 962-963
- 19) *O.C.*, t. I., p. 91
- 20) René GALAND, *Baudelaire, poétiques et poésie*, p. 366
- 21) 多田道太郎編『悪の花注釈』 p. 966
- 22) *O.C.*, t. I., p. 91
- 23) BAUDELAIRE, *Les Fleurs du Mal*, p. Jacques Crépet et Georges Blin, p457
- 24) *O.C.*, t. I., p. 692
- 25) 多田道太郎編『悪の花注釈』, p. 968
- 26) *Ibid.*, p. 967
- 27) *Ibid.*, p. 968
- 28) *O.C.*, t. I., p. 292
- 29) *Ibid*
- 30) *Ibid*
- 31) *Ibid*
- 32) *Ibid*
- 33) *Ibid.*, p. 292-293
- 34) *Ibid.*, p. 293
- 35) *Ibid*
- 36) 阿部良雄訳註『ボードレール全集 IV』, p. 462
- 37) *Ibid.*, p. 499
- 38) *Ibid*, p. 293-294
- 39) *Ibid.*, p. 294
- 40) *Ibid*
- 41) 阿部良雄訳註『ボードレール全集 IV』, p. 462

- 42) *O.C.*, t. I., p. 294
 43) *Ibid*
 44) BAUDELAIRE, *Correspondance*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1973, T.I, p. 153
 45) *Ibid*.,p. 151
 46) *O.C.*, t. I., p. 339
 47) *Ibid*
 48) *Ibid*

参考文献

- BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, p.Claude Pichois, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1975, 1976, 2vols.
 BAUDELAIRE, *Les Fleurs du Mal*, p.Jacques Crèpet et Georges Blin, José Corti, 1942.
 BAUDELAIRE, *Les Fleurs du Mal*, p.Antoine Adam, Garniers Frères, «Classiques Garnier», 1961.
 BAUDELAIRE, *Petits Poèmes en prose*, p.Robert Kopp, José Corti, 1969.
 BAUDELAIRE, *Petits Poèmes en prose*, p.Henri Lemaître, Garniers Frères, «Classiques Garnier», 1962.
 Robert Benoix CHÉRIX, *Commentaires des “Fleurs du Mal”*, Droz, 1962.
 René GALAND, *Baudelaire, poétiques et poésie*, Nizet, 1969.
 J.-D. HUBERT, *L’Esthétique des “Fleurs du Mal”*, P.Callier, 1953.
 J.E. JACKSON, *La mort Baudelaire*, la Baconnière, 1982
 Steve MURPHY, *Logiques du dernier Baudelaire Lectures du Spleen de Paris*, Slatkine, 2003

Jean PRÉVOST, *Baudelaire, essai sur l'inspiration et la création poétique*, Mercure de France, 1964.

Jean Pierre RICHARD, *Poésie et profondeur*, Seuil, 1955.

Mario RICHTER, *BAUDELAIRE, Les Fleurs du Mal, Lecture intégrale*, Slatkine, 2vols, 2001

Jean Paul SARTRE, *Baudelaire*, Gallimard, 1947.

阿部良雄訳註『ボードレール全集Ⅰ－Ⅵ』, 筑摩書房, 1983－1993.

多田道太郎編『悪の花注釈』, 平凡社, 1988